
悠久のクロウ（仮）

mohi-san

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久のクロウ（仮）

【Nコード】

N0301R

【作者名】

m o h i - s a n

【あらすじ】

何処と無く自己に欠け、やる気もない。しいて情熱を注ぐことがあるとすれば昼寝だけ。

そんなクロウ・エステルがいる場所は何故かオストラント王国、王立特殊訓練校——通称魔導学院と呼ばれる場所。生徒に求められるのはやる気と純粋な実力のみ。

だがそこでもクロウは常にマイペースだった。成績は最下位で魔法の一つすら使えない完全落ちこぼれ。

そんな劣等生街道をまっしぐらな彼の望みは惰眠をむさぼること。

平穩無事に過ごす事。

しかしそんなどうしようもない願いも彼を取り巻く環境がソレを許してはくれない。

時代の波はやがて動乱の時を迎え、クロウの意思を無視して否応なしに彼を巻き込んでいく……

プロローグ

「ねえ、また会える？」

桃色の髪をしたおっとりした顔つきの少女が泣きながら言った。
それに対する少年はどこか感情を宿さない無機質な瞳でぼんやり
少女の濡れた瞳を見返す。

「また会えたら……大人になって会えたら………」

そんなことありえない。少年は思った。

いや、少女も思ったかも知れない。

少年は知っている。

死ぬのだ。

ここでは……

この世界には“死”が溢れている。

本当に溢れている。

日常的に死を意識するくらいに。

こんな小さな二人が分るくらいに世界には死が溢れているのだ。

特にこの孤児院では強く死を意識させられる。

だからそれは……

少女は続ける。

「大人になったら、わたしと結婚して……」

少年は答えなかった。

少女の言葉が限りなく叶わぬ夢、遠い幻の様に聞こえたから。

「わたしを……お嫁さんにして……」

少女の声は不安を現す様に徐々に小さくなり最後の方には周囲の音に飲み込まれてしまう。

「それでね……」

そこで改めて少女が何かを言おうとしたとき――しかし言葉はそこで遮られた。

その小さな少女の肩を、黒いスーツに黒の帽子を被った初老の男性が肩を掴み引き寄せ言い聞かせる。

「時間だ。泣くのは終わりにしろ。これからお前は強くならねばならない。弱ければ死ぬだけだ」

そう、それだけ。

その言葉に少女は怯えたように男性を見て……少しの間を置いて頷いた。

一度少年の顔を覗きこむが、少年の顔は変わらない。相変わらず何を写しているのか分らない無機質な瞳で少女を見ているだけ。

どうやら少女の言葉に答えてくれる気はないらしい。

その事に少女は悲しくなり、俯き、諦めたように男に促されるまま少年に背を向ける。

「……………」

そうだ。

分っていた。

どうせ死ぬのにそんな約束をする意味などない事は……
だけど目標が欲しかった。

生きる励みになる希望が欲しかった。
縫れるモノが欲しかった。
それだけ。

少女の顔は絶望したかの様に凍りつく。
もう笑うことはないかもしれない。

「行くぞ」

男の言葉に少女は歩き出した。

何の意味もない道を……

目標もない

夢もない。

希望もない。

これから私はこの男の人形になる。

ただ戦い、人を殺めるための操り人形に。

と――

そのとき。

少女の背中から声が掛かる。

「また……」

少年の声だ。

少女は足を止め振り返る。

そんな少女に少年は言葉が続ける。

「また……会おうな」

その言葉に少女は驚く。

「……ぜったいに」

そして少女の顔は一転、瞳に再び涙を溜め泣きそうになる。

「約束するよ」

その言葉で少女の涙は遂に溢れ、顔には笑顔が戻っていく。
少女は頷く。

「うん」

力いっぱい頷いた。顔には花のような笑顔を咲かせて。
瞳には先程までの絶望の色はない。
生きる。

そんなやる気に満ち溢れた瞳をしている。

「だからお前も死ぬな」

その言葉に少女はもう一度、力いっぱい頷くと少年に言葉を返す。

「約束する。だから……だからクロウも絶対に約束守って」

少年は苦笑を浮かべて曖昧な表情で『ああ』と短く一言だけ返した。

遠く幼い日の約束。

しかし少女の心には鮮烈な思い出として深く刻みこまれた。

プロローグ（後書き）

お試し投稿です。

片手間でちまちま書いてた練習作品のストックが溜まったので気まぐれに投稿。

これから二、三日の間ストックが切れるまで投稿します。

1

声で溢れている。

若い男の声。

若い女の声。

そこは沢山の声で溢れていた。

「そこっ！ 態勢崩すな！」

「はい！」

「集中しろ！ 魔法くるぞっ！」

「分ってる！ そっちっ、右からも来てる！」

飛び交う怒声。命令。返事。

様々な声が言葉という形を持って空気を震わせる。

合間、合間で魔法がぶつかり地を震わせる音は、その声すら覆い隠してしまう。

まさに戦場……

そう言ってもいいかもしれない。

しかし……

この戦場に立つもの達の顔からはいまいち緊張感というものに欠ける。

手を抜いている訳ではない。

みんな必死だ。

しかし命のやり取りをしているという決定的な緊迫感に欠けるのだ。

だがそれもここでは仕方がないのかもしれない。

——だってこれは戦争では無く模擬戦なのだから。戦場であって兎戯に等しい場所だ。

ここに居る者の全ては、正規の兵ではなく生徒。

学生という名の訓練兵だ。

判断力も実力も覚悟も本物の一人前には遠く及ばない。

それでも――

この演習場の大地を震わせるほどの力を持っている。

彼らは魔法と呼ばれる力を使い、一般の兵士とは一線を越えた力を保有している。

魔法は強力だ。

その力を持つだけで、持たないものの十人以上の戦力になる。

ときには一人で百を打ち倒す者もいる。

そんな魔法が扱える生徒ばかりが集められたのがここ、王立特殊訓練校。

通称――魔導学院。

魔法を扱う資質のある者を集め、専門的な教育を行っている学校。そんな学院に居る彼らは“ある意味”で選ばれた者と言ってもいい。

だがそれが幸せか不幸かは一概に言えない。

だって彼らは必ず戦場に行く。

殺し。

殺され。

死が蔓延する。

そんな場所に行くことが義務付けられている。

ある者は出世し。

ある者は無残な屍の山の一部になる。

だから――

大概が強制的にここに来る事になった若者達にとって、その価値は一概ではない。

少し離れた所。

模擬戦闘訓練から完全に距離を置いた所でその光景をボンヤリと見ている者が居た。

黒よりは茶色く短髪だけど少し長い髪、長身痩躯でどこか覇気が欠けててやる気が見えない。

そんな青年——クロウ・エステルは何を思っているのかまるで読めない無機質な瞳で、遠くからそれを眺めている。
すると、

「よそ見とは余裕だな」

男の声が横から聞こえた。

クロウはその声に反応し、視線をそちらに向けると拳が迫っていた。

速さと風をきる音もかなりの威力だと言う事が窺える。

だがクロウはそれを避けるでもなくジッと見据えている。

当然、拳など簡単に避けることができる。

その余裕振りを見れば誰だってそう思うだろう。

しかし、

「ふごおっ!？」

クロウは拳を顔面にまともに受け、奇妙な声を上げながら無様に地面に転がった。

これには殴った方も驚く。

「お、おい!？　なんで受けないんだ。普通防ぐなり避けるなりするだろう。本気で入ったじゃないか……大丈夫か？」

殴った男は本気で気遣うように地に倒れ付したクロウを見る。
太陽を反射する長い金髪に澄んだ青い瞳。体系は細身だが袖から

覗く腕からは決してただ細いだけじゃない事が窺える。

彼の名はレオン・ストレイン。

この学園でもちよつと特別な存在だ。

全の科目で成績をトップ。

学院内でも常に中心の人物であり、彼に心酔する者も少なくはない。

更に彼は――

名門八貴族の内の一つ、ストレイン家の嫡子であり。

本来なら決してこんなところに居るはずの無い人間だ。

だが彼はここに居る。

理由は色々と囁かれてはいるが定かではない。

直接本人に聞く度胸のある者もないし、彼自身が語ることも無い。

だから知られていない。

それはそれとして……

家柄よし、成績よし、性格も人柄がよくて問題なし。

そんな超がつくほどの完璧な人間と言って良い彼だが、彼は何か落ちこぼれのクロウと居ることが多い。

彼とは違い全科目をいつもぶつちぎりの最低点でこの学院始まって以来の記録的な成績を残し、授業は寝てばかり。人付き合いも悪く、人の話もあまり聞かない。

まさに学院の底辺と言ってもいい位置にいるクロウだが、何故かレオンは何かとクロウを気にかけていた。

「……ほら」

そう言ってレオンはクロウに手を差し伸べる。

だがクロウはその手を取らずに一人で立ち上がる。

その事にレオンは微苦笑を浮かべクロウに声をかけた。

「おい、人の親切はちゃんと受け取るものだぞ」

「俺を殴り倒した張本人が言うな」

そのぶっきらぼうな物言いにレオンの微苦笑は苦笑に変わる。

「それは受身もとらないお前が悪い。それに余所見なんかしてるからそんな事になるんだぞ。普通にしていれば避けられないまでもちゃんと防げたはずだ」

「余所見しているのが分かって殴りかかるのもどうかと思うぞ」

クロウはレオンの言葉に対して少し嫌味を込めて返す。

一応殴られ事を根にもっているようだ。

その態度にレオンは「ふうっ」と息を吐くと肩の力を抜き、クロウに苦笑ではなく笑みを向けた。

「それは悪かったと……少しは思ってるさ」

「少しかよ！」

クロウがすかさず突っ込みを入れるが、レオンはそれを笑顔でサラッと流して続きを口にする。

「だが今は訓練中なんだから仕方ないだろ……気を抜いたお前が悪い」

そう言ってクロウの殴られた箇所を人差し指でぐりぐりと押す。クロウはその指を煩わしそうに払うと、どこか諦めたように息を吐き、

「ああ、わかったよ。俺が悪かったよ」

話すだけ無駄。そう言わんばかりの態度でレオンに背を向けて歩き出そうとする。

そんなクロウにレオンは意地悪そうな笑みを張り付けてその背中に向って声をかける。

「どこに行くんだ？ まだ授業は終わってないぞ」

「医療室。口の中切ったから治療してもらう」

「そうか……だが寝るんじゃないぞ。後で教官に様子見てきてもらうからな」

その言葉にクロウは内心で軽く舌打ちを打つと、何も答える事無く演習場を後にした。

レオンは遠ざかるクロウを見送りながら口元に手を当て楽しそうな笑みをうかべて、

「やれやれ、あいかわらずの奴だな」

そう呟いた。

いまだクロウの背中を眺めるその瞳はまるでダメな弟でも見るような優しい目をしていた。

1 (後書き)

今日はここまで。

クロウは宣言通りちゃんと医療室に向っていた。

「まったく、レオンの奴。せっかくだどこか適当な場所で昼寝でもしようかと思ったのに……あゝあ、めんどくせえ」

そう言って大きな欠伸をする。

「あいつもなんで俺なんかに構うかねー、俺なんかと付き合ってたてなんも得することなんかないと思うんだけど……まあ、どうでもいいか」

そう言うや、もう一度欠伸をして目元緩める。その表情は本当にどうでもいいという感じでやる気が欠片も感じられない。

油断したら歩いたまま寝るのでは……

そんな事を思わせるほどに眼をトロロンとさせている。

それでもクロウはなんとか医療室に辿り着くとノックもなく無遠慮に扉を開け放つ。

すると中からは誰かが息を飲む気配が伝わってきた。

クロウは『なんだ?』と思うも、眠気と持ち前のやる気のなさのために即刻頭の隅に追いやり考えを放棄した。

しかし入った瞬間クロウは早速さっきの考えを後悔する事になる。

「……………」

「……………」

場に流れる重たい沈黙。
医療室には先客が居た。

それ自体は問題ない。

相手が女だという事も問題は無い。

そのうえ女が上半身裸でなにも身に付けていないという事も……
まあ、これも些細な問題だ。

問題は相手がクロウの知る人物で、更に言うならクロウの事を嫌っている人物でクロウに対しては容赦のない人間だということだ。

クロウはこのあまりの巡り合せとタイミングの悪さに、いるかどうかすら定かでない神に恨みの呪詛を呟く。

そんな感じにクロウが半場現実逃避していると、見えている胸を隠そうともせず俯いた女が沈黙を破って何かを呟く。

「――らず――までも……」

まるで奥歯を噛み締め、堪えるような声。

その静かな声が逆に恐怖を誘う。

クロウは良く聞き取れはしなかったがその言葉で意識が現実に戻る。

目の前には年頃の男の子なら喜びそうな桃色な絶景が広がっているが、クロウにそれを気にする余裕はない。

先程から背中には大粒の汗が噴出し、頭の中は危険を知らせる信号で一杯だった。

（どうする？ どうやってこの危機的状況を抜け出す）

考えるが一向にいい考えは思い浮かばない。

考えれば考えるほど絶望的な未来が描き出され焦りばかりが募る。
少女はもう一度呟く。

「一度ならず二度までも……」

今度はクロウの耳にもしつかりと届く。

同時に危険を知らせる信号は三割増しになった。

これは本格的に逃げる準備をしなければ……

そんな思いが浮かび上がったとき、少女は漸く面おもてを上げた。

その顔は羞恥と怒りで真っ赤に染まり、今にも掴みかからんばかりの顔でクロウを睨んでいる。

彼女の特徴である長くてサラサラな綺麗な金髪も今は怒りに震え、その身の怒りを表すアクセントの一つでしかない。

キッ、そんな表現が似合いそうな表情でクロウを見ると遂に女は爆発した。

「一度ならず二度までも私の裸を見るなんて!! ワザとですか!?
ワザとなんですか!? ワザとなんですよね!? いいえ絶対
にワザとに決まっています!! 狙ってやっているに違いありませんわ!!」

「お、おちつけ、エリーナ」

その剣幕にクロウはたじろぎながら無駄と分りつつ声を一応落ちつかせるように声を掛ける。

だがその言葉焼け石に水……いや、油となって更に少女——エリーナの怒りを増長させる。

「おちつけですって! これがおちつける訳が無いじゃありませんの! 婦女子の裸を覗いておいて良くそのような戯言が口にできますわね」

「いや、覗きたくて覗いたわけじゃないし。それに見たいものでも……」

「なにか……?」

瞬間、場の空気が凍る。

空気が確かな質量を伴って重く、濃く、冷たいものへと変貌していく。

殺気……

その域にすら昇華されようとした場の気配を感じ、クロウは無意識に首を横に振っていた。それでも場の空気が戻ることはない。

凍てついた氷よりも冷たい眼でクロウを見据える青い瞳はより一層の鋭さを増していく。

「まあ、いいですわ。とりあえず……覚悟はいいですわよね」

そう言ってさっきまでの表情を一転させてニコツと笑うエリーナ。その笑顔は彼女本来の美しい容姿もあって本当に綺麗な笑顔だ。だが場を支配する空気だけは微塵も変わっていない。

いや、むしろ更に温度が下がったように感じられる。既にクロウの首筋にはぶつぶつと鳥肌が立ち、酷い事になっている。

「エ、エリーナ……それは、なんだ？」

クロウはエリーナの右手を指して言う。

見れば彼女の右手は薄い緑色の光に包まれている。

「あら、分りませんか？ 魔力の収束ですわ」

ニコツと綺麗な笑顔と共にクロウの言葉に返す。

余剰魔力が溢れだした右手からはバチバチと煩いほどの音を立て、過剰に注ぎ込まれた魔力が外に逃げようと電流の様に走っている。

これは相当な魔力量がなければ出来ない芸当だ。

見ただけで分る、その高すぎる威力にクロウの頬は痛い程に引き
攣る。

このままでは本当に死ぬ。

総判断したクロウは最後の抵抗を試みる。

「あゝ、えゝつと……綺麗だったよ？」

クロウがそう言った瞬間、

バチッ！

一際大きい音が室内に響き渡る。

音の出所は言うまでも無くエリーナの右手だ。

彼女は既に先程までの笑顔を消し、今は能面の様な感情の窺えない冷たい顔をしていた。

「あなたって人は……」

エリーナから声が漏れる。

その声は今まで一番穏やかな声のはずなのに、今までで一番怖いと感じる声だった。

それでクロウは悟る。

あっ、ダメだ……

次の瞬間――

「いっぺん死になさいッ！！」

それは来た。

エリーナ怒声と共に放たれる魔力が上乘せされた拳。

それが見事に顔面に決まる。

襲い来る衝撃は、クロウに悲鳴を上げることすら許さない。

本日二度目になる顔面への拳は、一度目を遥かに上回るスピードとパワーにより一瞬でクロウの意識を刈り取って言った。

「ほら、顔をこっちに向けなさい」

「いつつ、もっと優しくしてくれ」

「文句言わない。やってあげてるだけ感謝しなさい」

あれから束の間の気絶を楽しみ、バケツで水をかけられ目を覚ますという、非常に貴重な経験をさせて貰ったクロウは現在ベッドに腰掛けて治療を行っていた。

勿論、治療を行っているのはエリーナである。

彼女は現在裸ではなく、既にこの学園の制服を着ている。

「まだ怒ってるのか……?」

「あたりまえです!」

蒸し返してくるクロウにそう言うのと彼の顔に押し付けていた消毒薬の染み込んだ綿棒に力を込めてぐりぐりとする。

『いだだだ』とクロウからは悲鳴があがるが、それを無視してしばらく続けているとエリーナはパッと手を引いた。

「お終いですわ」

「……兄妹そろって同じ様な事をするな」

その仕打ちにクロウは思わず愚痴にも似た言葉をボソッと呟く。するとその呟きをエリーナが拾い反応する。

「あら、お兄様にもされたんですの?」

「ああ、同じ様に殴られた後に傷口をグリグリとな」

「さすがお兄様ですわね」

「何がさすがだ！ 殴られるほうの身にもなってみろ」

吐き捨てるように言うと、クロウは憤然とした表情で眉間に皺を寄せる。

それを見て、エリーナは口元に手を当て薄く笑った。

「うふふ、どうせお兄様の件も彼方が悪いのでしょ？ おおかた訓練中に余所見をしていいのを貰った、そんなところかしら」

まるで一部始終を見てきたかの様な言葉にクロウは驚き、エリーナを見る。こいつ本当は現場を見てたのでは……そんな考えすら浮かびそうになる。

だがそこでふと、思い出したようにある事に気付く疑問を口にする。

「そういえばお前はココで何してたんだ？」

「――え？」

何気なくクロウから出た質問。

しかしクロウからの質問が余程意外な事だったのか、それとも質問の内容が予想の範疇を超えたものだったのかエリーナは不自然なほどに体を硬直させる。

その様子にクロウは『なんだ？』と内心で訝しみつつしばらくエリーナの顔を眺めていると硬直のとけた彼女は次第に焦った様な、それでいて落ち着きのない態度に変わって行く。その事にクロウは表情にこそ出さないが少なからず驚きを感じていた。

彼女の事を少しでも知る者がいれば同じ様な……いや、それ以上の反応が返ってくるのは間違いない。

この学院での彼女――エリーナのイメージは一言で言えば『完璧』または『超人』それがこの学院に在籍するものの共通の認識だ。

それが当たり前の事の様に周りに浸透するほどに彼女にはそれに見合った実力ちからも知恵あたまも精神力こころも持ち合わせていた。

成績は同学年では全科目を通してトップ。しかも二位とは大差をつけての一位である。

性格は曲がった事が大嫌いで少し頑固な所もあるが、何者にも媚びず、自分に驕らず、何事にも動じない。そんな彼女の在りかたに憧れ、称え、心酔する多い。中には彼女の事を戦の女神の一柱にちなんで『緑輝戦姫フル・ケーニア』と称して崇める熱狂的な信者がいるほどにその人気ぶりは高い。

少し逸れたが……

その彼女が今、クロウの前で目に見えて不自然なほどに動揺し狼狽している。

いつも毅然とし、自信と誇りに溢れた彼女が――だ。

今は普通の少女のように頬を僅かに朱に染め、額には汗を浮かべ動揺を露にしている。

「え、えと、あの、その……」

挙句には彼女の口からは要領を得ない言葉が出る始末。

クロウは今日の前で起きている光景が何処か現実から遠いモノのようにすら見えていた。

もうちよつとこの貴重な光景を見ていたい。

そんな気がしないでもないが、流石に時間が立ち見慣れれば驚きも薄れてくる。

それにこのままでは話が進まない。

まあ、そのことすらメンドくさいので本当はどうでもよかったのだが、レオンの言葉通りなら後で教官がここに来る可能性も高い。

いや、レオンなら確実にここに教官が来るように仕向けるだろう。そして今この部屋にはクロウとエリーナの二人。しかも二人共同じベッドに腰掛けている。

教官がここに来たときの事を考えると、どう考えても今の状況は自分にとっては良くない展開にしか事が運ばない気がする。

そんな訳あって、クロウはしょうがなく——本当にメンドくさそうにエリーナを落ち着かせる為に声を掛ける。

「とりあえず落ち着いたらどうだ」

「……へっ？」

「だから落ち着けて」

そう言っただけクロウは彼女の両肩を掴み強引にこちらを向かせると、エリーナの顔を真正面から覗きこんだ。

黒い瞳と碧い瞳——二人の視線が交差する。

二人の距離は互いの息が感じられるほどに近い。

(……………っ!?)

エリーナは瞬間的に全身を硬直させる。

表情すら狼狽えたときのソレそのままに……

クロウはそんな彼女の状況を見て取り、うむと一度頷くとあっさり彼女の両肩から手を離し距離を取った。

そして彼女の額に極自然な動作で手を持っていくと、

「ほら」

そんな軽い掛け声を共にクロウはエリーナの小さな額にデコピンをお見舞いしていた。

額からは『パチンッ』と盛大な音が響き、その音が威力の程を物語る。

クロウはその音に満足そうな表情を浮かべ、一方のエリーナはいえば額を押さえながら声にならない声を発してベッドに蹲っている。

た。

だがそれも直ぐに終わる。

復活したエリーナバツと勢い良く顔を上げクロウをきつく睨む事によって。

「い、いったい、なにをするんですの!？ お、女の顔を殴るなんて!!」

その顔は怒りで紅潮し、今にも掴みかからんばかりの勢いの剣幕でまくしたてる。

しかしクロウはそしらぬ顔でその剣幕を流しつつ、冷静な声でエリーナに言った。

「おちついたか？」

「おちつけるわけ……………」

クロウの言葉に言い返そうとしたエリーナだが言葉半ばで気づく。いつのまにか自分が動揺から立ち直っていることに。

「…………もう大丈夫そうだな」

そんな彼女の様子を見てクロウは空気を入れ替えるように大きく息を吐く。

一方エリーナはといえば冷静になり、醜態を晒した事を今更ながらに恥ずかしくなったのか顔を俯けてしまう。

「見苦しい所をお見せしましたわ」

ボソツと小さな声で呟かれる。

クロウにもその言葉は聞こえたが、特に何も言うことはなかった。

自然と会話は途切れ、辺りには沈黙が横たわる。
しばらくそのまま時は流れ……
時計の長針が二つめ刻もうというとき、

「じゃ、俺いくわ」

突如言葉は発したクロウは軽い調子で立ち上がり部屋の入り口に
向かって歩き出す。

エリーナはそれに何も答えない。

だがクロウが入り口に辿り着き扉に手をかけた瞬間、背中から声
が掛けられた。

「待ちなさい」

その言葉にクロウは一度は手にかけて取手から手を離す。

そのままエリーナに背を向けたまま応えた。

「なんだ？ まだ何か用があるのか？」

「さっきの質問の答え、まだ答えていませんわ」

さっきの質問と言われ、何のことだと思えるが、直ぐに思い出す。

「何だ？ 聞いて欲しいのか？ ここで何をしていたのか」

その言葉に一瞬、背後から逡巡するような気配が伝わってくる。
だがそれも直ぐに消え、簡潔な言葉が返ってくる。

「いいえ、聞いてほしくありませんわ」

自分から話を振っておいて、否定の答え。

いったい何がしたいのか……

その矛盾した行動にクロウは疲れた様に溜息をなく。
だがそこで「でも——」と彼女は続ける。

「聞かれた事に対しては応えないといけませんわ。それが礼儀ですから」

その言葉はエリーナらしい。

律儀で融通が利かない。

本当に彼女らしい言葉だ。

そう思うとクロウの口元には自然と笑みが浮かんだ。

「じゃあ、答えてくれるのか？」

クロウの言葉に彼女は弾む様な声音で応える。

「いいえ、答えたくありませんわ。だから答えたくないというわたしの意志だけをお伝えしときますわ」

背中からは彼女の楽しそうな気配が伝わってくる。

クロウはそれを感じ取り、どうあっても彼女が話す気が無い事を悟ると、そつと息を吐いた。

「そっか、じゃあ今度こそ行くわ」

「ええ、お引止めして悪かったわね」

「別に……じゃな」

そう言っただけで今度こそクロウは医療室を後にする。

扉が閉まると部屋には再び静寂が広がる。

そんな部屋でエリーナは閉じた扉をいまだに見ながらボソツと呟

いた。

「乙女の顔を殴ったお礼は後でたっぷりとさせてもらいますわよ」

その声は、まるで新たな悪戯を思いついた子供のように楽しげなものだった。

閑話 1

エリーナ・ストレイン。

名から分る通りレオン・ストレインの兄妹であり、一つ年の離れた妹である。

だが兄妹と言っても血の繋がりは半分ほどしかない。

レオンが正妻の子であるのに対してエリーナは妾の子供。

つまり腹違いの兄妹である。

本来ならエリーナはその生立ち故、ストレインの姓を名乗ることが許されない人間だ。

いくら父親が同じでも所詮は妾の子供。下流貴族ならまだしもストレイン家は国内でも有数の上流貴族、それも古くから国政にすら関わる名門八貴族の一つである。そんな大貴族の姓を名乗ること、それがどれほどの意味を持つか……

例え血の繋がった実父だとしても格式と体裁を気にする貴族では妾の子がその姓を名乗ることは絶対にありえない。

しかし何にでも例外は存在する。

幸か不幸かエリーナは生まれながらの高い魔法の才能と資質があった。それも二百年に一人いるか居ないかと云う程のとびっきりのモノが。

その才能を当時エリーナが三歳のときに見抜いた現ストレイン家当主は特例としてエリーナを養子として迎え入れ、エリーナは晴れてストレイン家の正式な一員となり今に至る。

現在のエリーナの家督継承権は第二位。

兄のレオン・ストレインに次ぐ継承権を持っている。

これはレオンの実弟である正妻の次男を抜いてのものだ。

これだけでエリーナがどれだけストレイン家にとって重要視されているかが分る。

まあ、それはいいとして……

先程の述べたようにエリーナは飛びぬけた才を持っている。それは鬼才と言ってもいい。

それに加えて幼少のときより家の専属の講師によりみっちり英才教育が施されたこともあり魔法の実力は相当なものになっている。

どのくらいかというと、この学院にいる生徒なら束になっても敵わず、軍の正規の魔法使いとなら一部隊と互角に渡り合える。

齢十六歳にしてこの実力である。これがどれほど凄いことか。

これなら学院で『フル・ケーニア緑輝戦姫』などと崇められるのも頷ける話である。

そんな彼女だが本来ならこの魔導学院に通う意味はあまりない。いいや、学院では教えられることがないと言ったほうが正しいだろうか。

既に実力なら学院にいるどの者よりも上、それは講師を含めても変わらない。知識もここで教わるものは全て過去に修めている。

彼女にとってこの学院の全てが復習を兼ねた退屈なおさらいにすぎない。

ハッキリ言って学院にいる時間は無駄以外のなにものでもない。

しかし――

彼女はある理由があつてここに來ていた。

表向きは社会見学や将来、軍に入隊したときの集団生活をここで学ぶとなっている。

だけど実際の理由は他にある。

それは自分の生い立ちや、家柄などが関係しているのだが……その本当の理由は同じ学院に在籍する兄のレオンすら知らない。

まあ、もしかしたら聡明な兄の事だから薄々は感づいているかもしれないが――とはエリーナも思っているが。

とにかくエリーナはここに確かな目的があつてここ來ていた。しかし……

やはりと言っているのか、彼女は入学当初からあらゆる意味で浮いていた。

家柄、容姿、実力。そのどれをとっても同学年では抜きん出ており、彼女本来の気質——高いカリスマ性もあって良い意味でも悪い意味でも悪目立ちしていた。

そのせいあってか、同学年でも彼女に友人と呼べる者はいない。皆が彼女に萎縮し、遠慮し、気をつかい、教師ですらそれは変わらない。

とても対等と呼べるような関係を構築できる環境ではなかった。原因の一端が彼女自身にもあるのだが無自覚故にそれに気付くことはなく、目下現在の彼女の悩みの種の一つとなっていた。

そんな中、兄を通して知り合った一風変わった存在。それがクロウである。

いつも眠そうな目をして、やる気の欠片も見られない締まりのない顔。

口を開けば欠伸ばばかりで、礼儀も何も無く失礼な事ばかり口にする。

そのうえ、メンドくさがりで直ぐに怠けようとし、注意すれば嫌な顔を隠そうともしない。

本当に外見通りヤル気の見られない——いや、外見以上にヤル気のみられない人間。

それがエリーナから見たクロウである。

だが同時にエリーナを対等に扱う貴重な人間だった。

最初こそは何故兄がこんな輩と一緒にいるのか理解できなかったエリーナだが、今ならば少しは理解できる。

兄のレオン・ストレインも良くも悪くも自分と同じ様に目立つ存在だ。

そんな兄が学院で見つけた唯一気を抜くことが出来る安らげる場所、それが彼の傍なのかもしれないとエリーナは思っていた。

それはもしかしたらわたしも……

そんな事を考えるほどには彼のことを意識しているのかもしれない。

とまあ、それはひとまず置いてくとして……

その日の彼女は朝から少し機嫌が悪かった。

理由は単純。子供みたいだが夢見が悪かったからだ。

その所為あって彼女は朝からつまらない失敗ばかりを重ねていた。朝はお気に入りのカップを割り、授業では提出する課題を忘れるなど――

そんなつまらないが失敗が重なるたびに彼女の機嫌もよりいっそう悪くなっていく。

そして極め付けがこれである。

「キャッ」

教室に響き渡る短い悲鳴と小さな爆発音。

彼女の周りには割れたガラスの破片が散らばり、散々たる光景が出来上がっていた。

今の時間は付与魔法学の授業。

付与魔法とは魔法に態勢のある特定の道具にある種の指向性を持たせた魔法を付与させ、その道具本来の力を増幅させたり、その道具本来にはない力を付与させる魔法の事である。

例えばただの石に熱を持たせたり、物の強度を上げたりなど……使い方しだいでは大変便利な魔法であるがその分色々と制約があり、そこまで使い勝手がいいという代物ではない。

話が逸れたが……

現在、エリーナ達のクラスは授業の課題である『強化』の実習中だった。

内容はガラスに魔力を流し込み、強度を上げるといふもの。

これは付与学の基礎中の基礎と呼べるもので、誰もが一度は通る難関だ。

魔力を流し込み過ぎればガラスが魔力に耐え切れずに砕け、逆に足りなければ十分な強度を得る事が出来ない。

この課題に成否は関係なく、生徒達に魔力の流れと微細なコントロールを学ばせるという側面も持っている。

当然英才教育を受けていたエリーナはこの過程を当の昔に終了させている。

エリーナからすればさして苦勞する事も無く当たり前のように出て来ることだ。

しかし今日はいつもと違っていた。

普段の彼女なら失敗することなどありえないこの課題、しかし今日は機嫌が悪いということもあり極端に集中力を欠いていた。

その結果、魔力のコントロールを誤り必要以上に流し込まれたガラスは破裂。

普通の者なら欠けるか割れるか程度ですむ結果が、彼女生来の魔力の高さ故に被害を拡大させていた。

「大丈夫ですかお姉さま!？」

慌てた様子で赤髪の少女が駆け寄ってくる。

クラスメイトで同年にも関わらず“お姉さま”という敬称に一瞬顔を顰めるもエリーナはそれを周りに悟らせることはさせずに安心させるようにニコリと微笑んだ。

「ええ、大丈夫よ。そんなに心配しないで」

「でもお手が……」

そう言われ、エリーナは自らの手に瞳をむける。

すると親指の付け根辺りから先に渡って三センチほどの切り傷が出来ていた。

そこから痛ましそうに真っ赤な血が滲み出ている。

「ガラスの破片で切ったのね……そんなに気にするほどの怪我じゃないわ。ほっとけば自然に治るわ」

この程度本当にたいした事はない。

そんな風に言うエリーナの言葉に赤髪の少女が待ったをかけた。

「ダメです！！ 放っておいてバイ菌が入ったらどうするんですか！ それにこのままでは傷跡も残ってしまいます！！」

エリーナの手を掴み鬼気迫る表情で詰め寄る赤髪の少女。

エリーナは目の前の自分よりも小さな少女の気迫に確かに圧されていた。

「だ、大丈夫よ。少しすれば血もすぐに止まるわ」

「ダメです！ 早く治療をしなくちゃダメです。私も一緒に治療室に行きますから。だから、さあ！ さあ！ 早く行きましょう！」

鼻息荒く、興奮した面持ちで一気に捲くし立ててくる少女にエリーナは言い知れぬ身の危険を感じ一步、身を引く。

このままでは自分とはんでもない目に合うのでは……

そんな考えが過ぎり、体に僅かな震えが走る。

恐らくこのまま断り続けたら自分は強制的に目の前の少女に連行されることになるだろう。

それだけではどうしても避けなければならない。

彼女の直感が、本能が確かにそう訴えかけていた。

ならどうするか……

エリーナは一瞬の思考の元に答えを見つけ出すと、少し申し訳ない表情を作りながら未だ興奮最高潮の少女に向って落ち着かせるように語りかけた。

「分りました医療室には行きますわ、ですがイオさんはここに残ってください。私のせいで授業をサボらせる訳にはいきませんし、たいした怪我でもありませんから付き添いも不要ですわ」

「ですが怪我の手当てを……」

「それも向こうに養護の先生がいるから大丈夫です。お願いだからこれ以上我俣を言わないで」

困った顔を浮かべて赤髪の少女、イオを見るエリーナ。

イオはその表情を見て、しょんぼりした様にうな垂れるとコクンツと無言で頷いた。

「ありがとうございます。それでは私は医療室に向いますのでイオは先生に連絡をお願いね」

「わかりました……お姉さまも御気をつけて」

「ええ」

とまあ、そんな事があり現在エリーナは医療室に向けて足を向けていた。

「はあ……私としたことが魔法の制御を誤って怪我するなんて」

自嘲的な言葉を呟き、少しだけ肩の力を抜く。

自然と傷口に目が行き、自分の不甲斐なさを再確認しますます彼女は落ち込む。

「早く治療して授業に戻らないと……まったく情けない」

深かい溜息が彼女の口から漏れる。

そのままとぼとぼとした足取りでしばらく歩いているとエリーナは医療室のまえで一度立ち止まり、

「失礼しますわ」

その言葉と共に扉を開け部屋の中へと入っていった。

だが中から返事が返ってくることなく、中は以外にも無人だった。

「あら、珍しいですわね。いつもなら先生がいるはずなのに……」

そう言って周囲をキョロキョロト見回し、薬棚をみつけるとそちらに近づいていく。

「先生もいないみたいですし、悪いとは思いますが勝手に使わせてもらいますか……後で一言報告すればいいことですし」

中から薬ビンの一つをとるとラベルを確かめ、それを持ってベッドの一つに腰掛ける。

「っ！ 少し染みますわね」

塗り薬の予想以上の痛みによりエリーナは思わず顔を顰める。

しかしそれも一瞬。

薬の効果もあってみるみる傷痕が消えていく。それに伴い痛みも次第に引いていった。

「さすがは学院謹製の魔法薬ね」

手を軽く一瞥し、感心した様な言葉を呟くとエリーナは立ち上が

る。

「さて、もう用もないですし薬を戻して教室に戻りませんか……」

言ってエリーナは薬棚に体を向けるが、そこである物に彼女の視線に止まる。

その視線の先には土台に棒を立てた様な物があつた。棒の先端には水晶の様に光沢のある、四角い半透明の青い石が取り付けられている。

「あれは体重計……そういうば最近計っていませんでしたわね」

思い返し、入学時の測定以来計っていない事を思い出す。

エリーナは薬ビンを棚に戻すと、入り口には向わずそちらに近づいていく。

「先生も居ないことですしちょっとくらいならいいですわよね」

そう言つて靴を脱ぎ、そつと片足から体重計の上に乗つけていく。次の瞬間、棒の先端に取り付けられた青い石が淡く輝き始める。エリーナはそれを気にせず、もう片方の足を乗つけ遂に両足で体重計に乗った。

すると青い石は軽く明滅した後、徐々に光が収まっていく。

エリーナはその石を真剣な表情で食い入るように見つめている。

そして――

明滅が収まったとき、その石には文字が刻まれていた。

ピシッ！

エリーナはその文字を見てまるで氷像の様に固まる。

だが直ぐに、我に返るともう一度食い入るように見つめ目を見開いた。

「そ、そんな嘘ですわ！？　こんなに体重が増えているわけ……
きつと計器の故障に決まっていますわ！」

叫び、体重計から乱暴に降りるエリーナ。

青い石は彼女が足が体重計から離れた途端にその文字を消滅させ、
元の半透明な石に戻る。

エリーナは憤然とした面持ちで体重計を眺め、続いて自分の脇腹
を掴む。

「まさか……ね。いいえ、そんな事あるはずありませんわ。食生
活も今まで通りですし、日課の鍛錬も今まで通りこなしている。何
一つ変わったことなんてありませんもの」

うんと一度頷き不安を誤魔化すように頭を横に振る。
しかしやはり不安が拭えないのか横目で体重計をもう一度見た。

「そうよ……きつと服のせいね。服のぶんの重量が加わって、そ
のぶん重くなったんですわ。そうに違いない」

そこまで言ってエリーナは一度を周りをキョロキョロと見回し、
辺りに誰も居ないのを改めて確認する。

その頬は俄かに赤く、若干緊張した面持ちであった。

そして何かを決心したような表情を浮かべると、おもむろに制服
のブレザーに手をかけ始める。

少しの衣擦れの音を残してエリーナはあっさりとブレザーを脱ぎ
捨て、それを丁寧に畳むと床に置き、もう一度体重計に乗った。

そしてまたも固まるエリーナ。

「そ、そんなわけありませんわ！」

凍結から解除されたエリーナは焦った様子で体重計から降り、もう一枚服に手をかける。

今度は白いシャツに手をかけ、ボタンを外すのも煩わしいと言った感じにシャツをサッと脱ぎ捨てる。今度は畳むような真似はしない。

そしてもう一枚……

「……………こうなったらこれもですわっ」

下着に手をかけ一瞬、逡巡する素振りを見せるも彼女はそれも思い切って脱ぎ捨てた。

その時だった。

——ガラ

突如扉が開かれる。

その音に驚き、彼女の肩がビクリと飛び跳ねる。

顔を真っ青にしながら最悪な展開を想像しつつエリーナはユックリと首を音の方向に向ける。

すると……

そこには眠たい目をしたまま大きく見開くという器用な真似をしたクロウがいた。

瞬間的にエリーナの頭は真っ白になる。

その直ぐ後に彼女の羞恥と怒りによる叫びが上がったのは言うまでもない。

余談だが、体重計は良く見れば裏に故障の二文字が刻まれていた。

閑話1（後書き）

感想、評価お待ちしております。

新入生を迎えて半年ほど経ったこの時期。

この魔導学院では毎年恒例の行事というかちよつと変わったカリキュラムが行われる。

同時に教員が一時的な人手不足に陥る。

これはこの時期に行われる三年生の実力試験が大きく関係する。

この学院の生徒は卒業すると一部の特別な例を除き必ず軍に従事することになる。

そしてこの学院では三年は最終学年である。

翌年には三年生は卒業し軍に入ることになるため、三年生にとってこの一年は学院最後の思い出を作る特別な一年であり、また将来を左右する大事な一年である。

この時期に計られた成績結果は直接軍に提出され、それを基に軍での配属先、赴任先が決まる重要な意味をもつものだ。

もちろん生徒の将来だけではなく、国の将来すら左右すると言っても過言ではない。

そんな事もあり三年生のこの時期の試験は特別な意味を持ち、試験内容も今までのとは違った特別なものとなっている。

そのためこの時期になると試験の準備に多くの教員が追われ、人手不足に陥ると言った事態が発生し、一、二年生まで手が回らなくなるのだ。

その問題を解決するために出来たのが『生徒間指導実習』であり、簡単に言えば二年の生徒が一年の生徒に簡単な指導をするというもののである。

一年と二年で二人一組のペアとなり、内容は各々に任せられる。

座学で質問を受け付けたり、実習で分からない所を教えたり、訓練したり……

まあ、要するに今は教員が手を離せないから生徒同士で適当にや

つとけということである。

しかしこんな適当な授業内容である。もちろんサボる者なども少なからず出てくる。

そう考えるのが当然だ。だが意外な事に予想に反してサボる者はいない。

何故なら学院も馬鹿ではない。無論このための防止策は幾重にも考えられている。

例えば一・二年の双方の生徒には実習内容の報告の義務が課せられ、相互監視をさせたり。

他にも目に見えない所で様々な対策が施されており、サボれば直ぐに教員へと報告が行く仕組みが出来上がっている。

もしも教員へと報告がいった場合は相応の罰に成績へと直接影響する。

この学院では成績は絶対だ。

成績いかんでは将来に大きく影響し、未来の自分の命すら左右する重要なものだ。

だから普通の者はまずサボろうなどとは考えない。

それに学院ではこの行事を楽しみにしている者の方が大多数である。普段にはあまりない他学年との交流や、そこからの出会いや、その先を期待して心躍らせている者など動悸は不順だが娯楽が無く、殺伐とした行事ばかりのこの学院では皆の息抜きの一つとなっている。

それでもやはりこの行事を時間の無駄だと、好意的に受けられない生徒も確かにいる。

そしてクロウもそんな中の一人だった。

ただ彼の場合は他の者とは少し——方向性が違う理由だが。

「めんどろだ……」

クロウは眠そうな眼をこすりながら壁際でぼんやりと目前の光景

を眺めていた。

クロウの視界に映るのは人、人、人。

埋め尽くす限りの同じ制服を着た学院の生徒がいた。

まあでもそれは今の目的とここに居る理由を考えれば当然の事だった。

現在ここには一・二年の生徒全てが集められており、普段顔を合わせることの無い多学年の生徒同士の顔合わせと交流、それにペアを決めるための相手探しをしている。

そのため生徒達は少しでもいい相手を見つけようと躍起になっている。

特に男が異常なほどのヤル気を見せているのだが……

そういう奴に限って玉碎しているのは言うまでもない。

大概是萎縮してしまっている一年に二年が声をかけるとというのが普通だが、中には一年の方から二年に積極的に声をかけている者いる。

そしてそのどちらでもない——ちょっと異常な人の輪が出来上がっている所もあった。

一つは一年生女子の輪。中心には人の目を惹く綺麗な金髪の男がいて困った表情を浮かべている。

もう一つは二年生男子の輪。中心には同じく金髪の見目美しい女がいて、やはり困った表情を浮かべている。

言うまでもなくレオンとエリーナの二人である。

二人はその知名度、人気は本人達が考えているずっと凄い。

その証拠がこれであり、周りにはペアを申し込むための人垣ができています。

クレイはそんな光景を呆然と眺めながら思う。

「たいへんだなあ二人も……それにしても凄まじいなあ勢いと熱気は……」

今にも人の波に押し潰されそうになるのを器用に立ち回り防いでいる二人を見てクロウは感心してしまう。

もしも自分があの中心に居たら……

ありえない光景を想像しながらクロウはぶるっと身を震わせた。

そんなときだった。

「あの……いいですか？」

突如声を掛けられクロウは横を向く。

そこには見知らぬ少女が居た。

長い青髪を二つに左右でくくり、深い碧い色の瞳を持つ少女。容姿も整っていて綺麗というよりはまだ幼さの残る可愛い感じだ。身体は全体的に小柄でスラッとしているが出るところは出ている、女性としての部分をなんとも強調している。

クロウは自然にそこに目が行きかけ、彼女の胸にある征服のネクタイが白色だという事に気付く。

この学院の制服はネクタイが学年ごとに色分けされており、それが学年を見分ける基準となっている。

白なら一年、二年なら黒、といった感じに決められている。

クロウはネクタイの色から一年だと判断し、自分なんかに声をかけてきた物珍しい少女に応えた。

「なにか用か？」

何が嬉しいのかクロウが言葉を返すと少女はニコニコと笑顔を浮かべ続きを口にする。

「こんなところで一人でなにしてるんですか？」

「見てわからないか？」

「はい。分らないから聞いてるんです」

何でそんな事を聞のか、心底分らないと言った感じで少女はクロウに向って返事をしながら首を傾げる。

クロウはそんな少女の態度に小さく溜息を吐くと、メンドくさそうに答えた。

「見ればわかるだろ。めんどうだから見てんだよ」

「見てる？」

クロウの言葉にまたもや少女はコテンと首を傾げる。

その様子にクロウは微苦笑を浮かべ、目線だけで見ているほうを促した。

「そう、ただ見ているだけ。この光景を……」

その回答に少女は俯き、口元に手を当てしばし考え込む。

やがて顔上げると真剣な表情を作り真っ直ぐにクロウを見た。

「……つまり暇なんですね」

少女の口から出た身も蓋もない言葉にクロウはガクツと肩を落す。言っていることは正しいのかもしれないが真剣な表情で言われるとなんとも言えない気持ちになる。

クロウは今度こそ大きな溜息をつき、少女を正面から見た。

「いや、間違っではないかもしれないがもうちょっと言い方ってもんがあるだろ」

「言いかたですか？　でも暇なんですよ？」

暇——その言葉にクロウはまたしてもガクツと肩を落す。

少女からその言葉を口にされる度に最初からあるかどうか分からない気力が更に削られていくような感覚がクロウを襲う。

「だから――」

「――暇なんですよね」

クロウの言葉に割り込んでニコリと笑顔で口にする少女の言葉にクロウは大きくガクリと項垂れた。

どうもこの少女相手に何を言っても無駄なのだと、このときになってようやくと理解する。

クロウは諦めたような息を吐き、少女に「もういいです」と一言返すのがやっとだった。

少女は何故クロウが落ち込んでいるのか理解できていない様子で不思議そうな目でクロウを見ている。

周りの他の喧騒を他所にここに落ち込む男と、それを見て首を傾げる少女という、一種の不思議な空間が出来上がっていた。

クロウはこのままではダメだと頭を振り、気分を入れ替えると少女に話しかけた。

「用はそれだけなのか？　ならさっさと相手を探してきたらどうだ？」

クロウの言葉にあッと言った感じで口元に手を当て、何かを思い出した風の少女はクロウに向って少しだけ勢い込んで話しかける。

「そうでした！　わたし相手の方を探していたんです。教えてください」

そう言ってペコリと丁寧に頭を下げる少女の旋毛をを見てクロウはやはりこの子は天然なんだと確信する。

クロウがそんな事を思っているとは露知らず、頭を上げた少女は微塵の疑いもない純粹な瞳をクロウに向けると、今までで一番の笑顔を作りクロウの手を両手で握ってきた。

「ではよろしくお願いします。先輩」

「は……………ッ？」

クロウの間拔けな声が部屋の片隅に響いた。

「は……………ッ？」

クロウは固まる。

今の話の流れのどこにそのような言葉が出てくる要因があっただろうか。

必死に先ほどのまでの会話を思い返すが、心あたるものなど一つとしない。

この過程をすつとばしたぶつとんだ展開の流れにクロウは遅れないうちに……………というよりはこのままでは話がこの方向で流れそうだったので慌てて少女へと話しかけた。

「……………なんでそうなるんだ？」

「えっ？」

「いや、えっ？　じゃなくてどうしたらそういう話になるんだと聞いているんだ」

質問の意図がわからないと、不思議そうな表情を浮かべていた青髪の少女だがクロウが再度質問を補足すると漸く意図を理解したのか笑顔で返答する。

「わたしが声をかけたら先輩応えてくれましたよね」

「確かに答えたが……………」

「そしてわたしは相手の先輩を探していました。応えてくれたってことは了承したってことじゃないんですか？」

「ちよっと待て！　なんでそうなる！？　普通そうじゃないだろ」

「はえ？　違うんですか？　……………そんな……………わたしでっきり……………」

……」

先ほどの笑顔から一転。途端に少女の表情が曇っていく。クロウは少女のいきなりの変化についていけずボケツと見ていることしかできない。

「わたしまた勘違いしてたんですね………せっかくいい返事もらえたと思ったのに………ははは、馬鹿ですね………わたし………」

少女のかすれた笑いが響く。

クロウは何か言葉を掛けようとするが、いい言葉が見つからない。何かないかと必死に頭を巡らせるがそれよりも早く状況はどんどん悪化していく。

少女の肩は徐々に小刻みに揺れ。瞳は潤み、淵には過剰なモノが水滴となって溜まっていく。

この時になってクロウは漸く自体のマズサに気づく。

見れば周りからは、男女を問わず今にも射殺さんばかりの非難の視線がクロウに集中し、皆が行く末を見守っている。

大きく危機感を募らせたクロウの背中からは大粒の汗が伝う。

もともと壁際で周りとは少し浮いたやりとりをしていた二人である。

輪の外に居たことで逆に目立ち。さらに学院公認で無能のレッテルを貼られて何かと有名なクロウに可愛い一年の子の方から話しかけた。この事実にもテナない男共の僻みと妬み、それとは別に興味本位でかなりの数の人間が注目していたのだが……

不幸なことにクロウはそれには気づいていなかった。

そんな中での目の前の瞳に涙を溜める少女。

最悪な展開である。

クロウは慌て、助けを求めるように周囲に視線を巡らせる。すると一人の金髪の少女と目が合った。

エリーナである。

しかしその青い瞳は今にも凍りつきそうなほどに冷たく、感情の
見えない暗い色をしている。

心臓を鷲掴みされたような悪寒が走りぬけクロウはすぐに目を逸
らした。

（なんであんな目してんだ！？）

跳ねる心臓を落ち着かせ、今のは見なかったことにして気を取り
直すと更に視線を彷徨わせもう一人の金髪——レオンと目があうも、
こちらは顔に微笑を湛え、面白そうに口の動きだけで『がんばれ』
と伝えてくる。

その無責任で悪意ある応援にクロウは腹を立てかけるが——目の
前の今にも涙のダムが決壊しそうな少女を見て、予断が許されない
ことを悟ったクロウはすぐにそれを意識の奥底に押し込めた。

「お、おい、お願いだから泣き止んでくれ」

「……………ふあい……………すいみやせん……………しゅ、しゅぐに……」

そう言ってズズッと鼻をすすする少女。

全然大丈夫には聞こえない返事と態度にクロウの不安を余計に募
る。

そもそもこの状態で少女に完全に泣かれでもしたらクロウが明日
まで無事に居られる保障はない。

その証拠に先ほどから男たちの瞳がギラギラと嫌な光を湛えてお
り、少女の涙が零れた瞬間に殴りかかってきそうな勢いだ。

クロウは周囲を見て、続いて少女を見ると盛大な溜息をついた。
そして少女の頭に手を置くと投げやりな態度で言葉をかけた。

「あゝ、もうっ！ わかった！ わかったよ、やるよ！ だから泣き止め！」

クロウの少し大きな声に少女は驚いていたが、しばらくして意味を飲み込めたのか戸惑いの表情を浮かべてクロウに問う。

「ふえ……あ、あの……ホントにいいんですか？」

「ああ」

「ホントのホントに……？」

「ああ、いいって言ったら」

「迷惑じゃないですか？」

「迷惑だ」

クロウの即答に少女がシュンとなる。

それにクロウは苦笑を浮かべると続きを口にする。

「でも、もうやるって言ったからな。多少迷惑でも我慢するから大丈夫だ。だから気にすんな」

言い終えるとクロウは少女の頭に置いていた手を動かし力任せにグシャグシャと撫でる。

少女からは「はう」とか声が聞こえたがクロウは気にしない。

しばらくしてから手を離すとクロウは少女に改めて向き直った。

「そんで一年。お前の名前は？」

少女は撫でられ、乱れた髪を両手で押さえて気にしながら、どこかたどたどしい口調で小さく答えた。

「メナル……メナル・ストーンです」

「そっかメナルか……じゃあ、メルって呼ぶな。俺の名前はクロウだ。好きに呼んでくれ」

名前を呼ばれた瞬間、メナルは驚いた表情を浮かべて頬を僅かに染めると無言で頷いた。

それを見て、クロウは「よし」と呟き、少女に手を差し出した。

「んじゃ、短い間だがよろしくな。メル」

「はい……クロウ先輩」

メナルは恐る恐るとクロウの名前を口にし、そっとその手を取った。

クロウはその様子に笑みを浮かべ。

メナルは先ほどの事が尾に引いてるのか泣きそうな顔で笑みを浮かべた。

その時、笑みで細まったメナルの目元からは溜まった涙が一筋――頬を伝い零れ落ちた。

雫が床を打つ。

――次の瞬間、

部屋全体を振るわせる地響き轟く。

クロウが最後に目にしたのは、目を血走らせた男達が一斉に自分に襲い来る姿だった。

あれから場所は移り、大逃走劇を小一時間に渡って繰り広げたクロウは演習場の大地に大の字に倒れていた。

道中には同じように走り疲れ、力尽きて倒れた屍——もとい生徒達の成れの果てが山のように死屍累々と転がっている。

なんとか最後まで逃げ切ったクロウであったがそれでも本人も無事では済まず、他のもの同様にがっぽりと体力を根こそぎ持っていかれていた。

そんな呼吸荒く大地に倒れるクロウに話しかける影があった。

「いい運動になったみたいだな」

顔に爽やかな笑顔を浮かべたレオンだ。

レオンが立った状態からクロウを見下ろしている。

クロウはこの自称己のの友人と公言し、似非優等生气取りの悪魔の登場に露骨に嫌な表情を見せる。

クロウはそのままに一度大きく息を吸い、呼吸を落ち着かせると今だ楽しそうな笑みを浮かべているレオンに声をかける。

「なんだ、嫌味か？」

「ああ、嫌味だ」

隠す気など微塵もないのか大っぴらに嫌味だと言い切るレオンにやはりこいつの性根は最悪だとクロウは改めて思う。

こいつの本当の姿を心酔している者達に教えたらどうなるか。

幻滅するだろうか。

それとも新たな一面が好意的に受け取られるのだろうか。

だがきつとそのどちらでもない。

更にレオンはクロウの行動を止めようとしないうだろう。

そしてクロウにこう言うはずだ。

優等生の俺と落ちこぼれのお前。周りはどうちを信じると思う？
結果は見えているから無駄な事は止めとけ。

――と。

悪びれた様子もなく無邪気な笑顔でそう言うだろう。

そんな光景がありありと頭に浮かんだクロウは苦い表情を浮かべる。

「どうした？　まるで嫌な事を思い出したような顔をしてるぞ」

「嫌なも思いでなら現在進行形で更新中だよ」

そう言って立ち上がりとするクロウの前に手が差し出される。
手を辿ればそこには笑顔のレオンがいる。

「なんだこれは？」

「見てわからないか？　親切だ」

「そうか……なら全力で遠慮する」

一言でばっさりと切り捨てるとクロウはレオンの手を借りずに軽い身のこなしでサッと立ち上がる。

残されたレオンの手だけが所在無さげに虚空をさ迷う。

そんな自身の手を眺めながらレオンは呆れたような深い笑みを作る。

「ひどいな……たまには俺の好意を受け取ってもいいんじゃないか」

「どうせ受け取ったら、後で何倍にもして返せと要求されそうだからな」

「バレたか……嬉しいな。よく俺のこと分かってるじゃないか」

まるで子供が悪戯がバレたときみたいに、無邪気な表情で面白そうに笑うレオンにクロウは疲れたため息を吐いた。

さすがにからかいが過ぎたかと思ったレオンは少しだけの反省と共に今までの笑みを引っ込め、真面目な表情を作る。

「まあ、いつもどおりの挨拶はここまでにして、そろそろ本題にいきたいと思うんだがいいか？」

「はじめっからそうしてくれ」

クロウの呆れたような視線を受け、それをさらりと流すとレオンは続ける。

「まあ本題と言ってもたいした事じゃないんだ」

「じゃあ、俺はいく」

「まあ待て。たいした事はないと言ってもクロウには関係のある話だし、それにお前にとっては得のある話でもあるんだが、どうだ？」

その言葉にクロウは歩き出そうとした足を止めるとゆっくりとレオンに向き直った。

「くだらないと話だったらすぐに行くからな」

「ああ、ご勝手に。今度は俺は止めない。だが話は最後まで聞いてから判断しろよ。」

さて本題についてだが今日の午後から行われる一年への指導実習のことだ。そこでお前の組と俺の組、合同でやらないか？」

「断る。じゃあ俺はいくぞ」

即答するとクロウは再び踵を返そうとする。

そんなクロウの背中に向かってレオンは更に言葉をかける。

「魔法の使えないお前がどうやって一年の子に魔法を教える気だ？ 座学の質問にも答えられるのか？ できないだろ？」

クロウの歩みが止まる。

「だが俺ならお前に出来ない事を教えてやれる……別に本当に嫌なら断ってくれてかまわない。だがそれで後々苦勞するのはお前ではなくその一年の子だと言うことはお前もわかっているんだろ。

自分を選んだあの子が悪いなんて言い訳は通用しない。

お前はあの子の申し出を受けた以上、その言葉に対して責任が負わなければならない」

言いたい事は以上だとばかりにレオンはそこで言葉を切る。

クロウはレオンが言葉を切ってから少しの間を空けて漸くレオンの方へと振り向いた。

「それは誰のための言葉だ」

いつになく真面目な顔でクロウはレオンを見る。

もしもここで少しでも軽い気持ちや目的が一年の子の為ではなく、いつものようにクロウをいじり、自身の楽しみを優先させるようなモノならクロウは断ると決めていた。

レオンの言うとおりクロウも少しだが自分の言葉に責任を感じている。

半場なりゆきの事だったとはいえ、確かに自分はメナルの申し出を受けたのだ。

ならその事に対しては責任を持ち、真剣に向き合わなければならぬ。

だからこそ真意を探るようにクロウはレオンの言葉に集中する。
レオンも場の雰囲気を読み取り真剣な表情で答える。

「もちろん不運にもお前を選んでしまった一年のためだ……まあ後はちよっぴり妹のためかな」

最後の部分だけくだけた感じで言う。

何故そこでエリーナが出てくるのか疑問に思うクロウだったが、今のレオンの言葉には嘘や偽りは感じない。真剣な言葉にクロウには思えた。

クロウは息を一つ吐くと表情を緩めた。

「そうか……わかった。ならその申し出をうけるよ」

「受けてくれてよかったよ。お前ならきつと受けてくれると思ってた」

まるで最初から断れることなどないと確信していたかのようなレオンの自身が伺える声音にクロウは訝む。

だからクロウはつい、レオンに聞いていた。

「なんでそう思ったんだ」

その言葉にレオンは真顔のままにあっさりと答える。

「だってお前……やさしいだろ」

いつものふざけたやり取りの言葉ではなく、真面目な言葉。

男同士で面と向かって言われた、言ったほうも言われたほうも気恥ずかしくなる様な言葉にクロウの体に軽い震えが走る。

「レオン、お前言ってる恥ずかしくないか？」

「恥ずかしくはないな、事実だろ。お前は優しい」

対するレオンは平然とした顔でクロウに答える。

クロウは続くレオンの言葉で遂に限界に達したのか痒そうに全身掻きだす。

「その変なこと言うのをやめろ！ 全身が痒くなるだろ！」

「そうか、なら俺もこんなセリフを言ったかいがあるというものだな」

そう言って途端に真面目な顔を崩し口元に笑みを浮かべて、意地の悪そうな表情を作るレオン。

そこでクロウ気づく。

「てめえ……レオン！ また俺をからかいやがったな！？」

「気づかないお前が悪い」

クロウを指差し、満足そうな表情を浮かべるとレオンはクロウに背を向けて歩き出した。

「ではこれで本当に全ての用件が終わったから俺は行くよ。午後は教室に居ろよ迎えに行くからな」

「あっ！ 待てレオン！」

一言いってやらなければ気がすまない。そんな表情を浮かべてレオンの背を追いかけてようとするクロウにレオンは今思い出したかのように言葉を付け足す。

「あ、そうそう。そろそろ彼らが起きるみたいだよ」

彼ら？

その言葉に疑問を覚えたクロウだが、それは直ぐに解決する。

「よお」

声と共にクロウは肩を掴まれそちらに振り返る。

「……………」

するとそこには先ほどまでクロウと壮絶な鬼ごっこを繰り広げていた男たちが壮絶な笑みを浮かべて立っていた。

先頭のクロウの肩を掴んだが男がクロウに言葉をかける。

「続きやろうか？」

「……………」

あまりの光景にクロウは言葉を忘れて呆然とする。
そんなクロウに随分遠くへと離れてしまったレオンから声がかかる。

「午後の時間に支障が出るからほどほどにしとけよ」

「わかりましたレオンさん」

その言葉に元気に答える鬼たち。

クロウは心の中で呪詛の言葉をレオンに呟き、口に出して自分の無事を祈るように言葉を呟いた。

そしてそれが過激な鬼ごっこ再開の合図だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301r/>

悠久のクロウ（仮）

2011年5月31日17時42分発行